



なぜ研究者はDeadしてしまうのか？

若い頃に素晴らしい業績を挙げて鳴り物入りで教授になったのに、ラボを主宰してからパツタリと、あるいは徐々に鳴かず飛ばずになる研究者が少なからずいる。研究者の世界にも「働きアリの法則」のようなものがあるのだろうか。なぜ彼らは研究成果を出さなくなった、あるいは出せなくなったのか。その要因を自分が見てきた経験をもとに考察してみたい。

研究者にとって、世界で初めての発見をしたときの喜びは何事にもかえられない大きな感動があり、その発見を論文として発表することで、多くの研究者や社会から高い評価を受けることができる。すなわち、知的好奇心と自己顕示欲が研究活動の原動力だ。そもそも研究に対してさほど情熱を持っていない偽研究者が存在する。こういう人たちは、任期無しポジションを得ることが最終ゴールだから、いざ上がってしまえば、研究そっちのけで学内政治に夢中になったり、個人の趣味や家族に多くの時間を費やす。折角独立ポジションを得たのに何をもったいないことだろう。PIを夢見て悪戦苦闘する若手研究者に見せたくない醜態である。選考の際に偽研究者を見抜くのは困難であり、現状では彼らの定年を待つしかない。やはり教授になってからも厳しい評価システムと任期制の導入が必要ではないか。

次にラボ運営に失敗して失速するケースをみかける。「名選手、名監督にあらず」ということだろう。部下のやる気を出させるためには彼らの気持ちを理解して、目の前にニンジンをおぼら下げる必要があるのに、それを無視して独りよがりになるとラボは空回りしてしまう。一旦人間関係が破綻すると、どんどんエスカレートし、足の引っ張り

合いを始めてしまうともはや研究どころではない。昭和であれば高圧的な態度でラボメンバーに接しても大きな問題にはならなかったが、令和の時代ではそうはいかない。ハラスメント教員として失職することもある。人間関係の構築が苦手な人は、選手からいきなり監督にならずに、しばらくコーチとして小さな研究グループをまとめるトレーニングを積んでから監督になった方が良いのではないか。ラボ運営の成功の極意は人たらし術を身に付けることであろう。

私が最も残念に思うのは、やる気も能力もあるのに研究環境の劣悪さに研究を諦めてしまうケースだ。これは社会情勢や国の政策とも連動した深刻な問題だ。文科省による研究費の「選択と集中」政策を推進した結果、研究者間の研究費格差が大きく広がった。旧帝大を中心に一部の研究者に研究費が集中し、選択されなかった研究者は厳しい研究環境に追い込まれている。また大学教員に求められる書類業務量や学生対応も、私が教員になった頃とは比較にならない多さである。研究費や研究に費やす時間が少なくなると当然業績も下がり、ますます研究費の獲得が困難になる。とくに地方大学ではより深刻だ。まさしくそれが国の狙いなのだろうか。教育専任教員として位置付けられた地方大学の教員に研究のモチベーションを持つというのは酷な話である。日本の研究レベルを引き上げることを目的として策定されたポストク1万人計画によって、多くの優秀な研究者がアカデミアから輩出され、日本全国に散らばった。研究環境さえ整えば素晴らしい成果を挙げる潜在能力を持った研究者が多数いるはずだ。彼らの能力を活かすことなく、腐らせるのは何ともったいないことか。最近では研究の場を求めて隣国へ渡る人が増えている。批判する人もいるが、国内の研究環境が劣悪で、かつポジションが無いなら、海外へ赴くのは必然ではないか。

先日、私の所属先でPIを公募した。3桁を超える応募者全員の申請書に目を通して思わず怒りの声が漏れた。「この国の科学行政はとんでもない間違いをしている」。

(牡丹皮)